

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 5歳
成熟開始年齢： 1歳
産卵期・産卵場： 12月のごく短い一時期、沿岸の藻場、秋田県での産卵が多い
索餌期・索餌場： 未成魚期以降の分布・回遊に関する知見は少ない
食性： 端脚類、オキアミ類、魚類
捕食者： 大型魚類によって捕食されるが、実態は不明

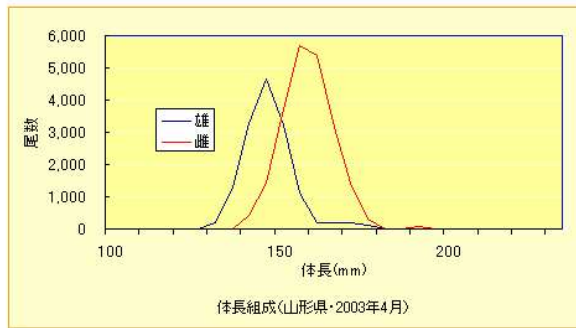
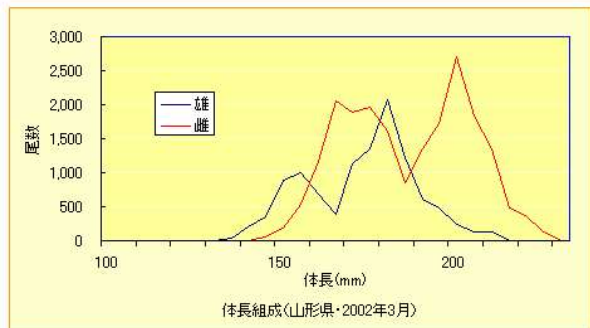
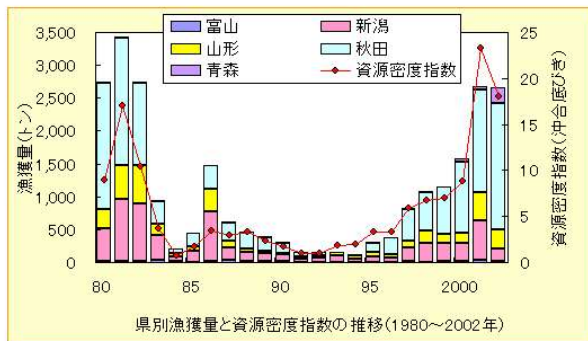
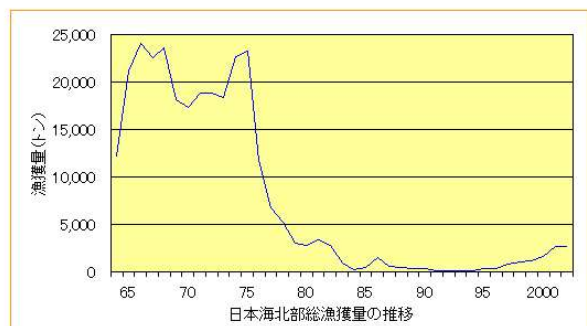


漁業の特徴

日本海北部のハタハタは秋田県での漁獲が多く、産卵・接岸期を対象にした定置網と刺網による漁獲割合が大きい（沿岸漁業）。また、ほぼ全域において小型底びき網や沖合底びき網によって漁獲される。

漁獲の動向

当海域におけるハタハタの漁獲は、1965～1975年には20,000トン前後の高い水準にあったが、1976年以降急落し、1991年には158トン（最盛期の0.7%）にまで落ち込むという劇的な変化を示した。秋田県は3年間の採捕禁止（1992～1995年）を実施し、その後も定置網統数の削減等の規制や、稚魚放流や産卵藻場の造成など、資源の回復に向けた取り組みを展開している。また、青森～新潟の4県では、全長15cm未満を漁獲しない自主的な規制を加えている。こうした措置の下で、近年、漁獲量は増加傾向にある。2000年末～2001年前半には前年同期を大きく上回る漁獲量が記録され、2002年末にも大量の接岸群が来遊した（秋田県の沿岸で約1,700トンの漁獲）。

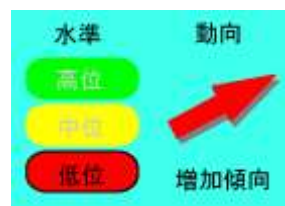


資源評価法

漁獲量の推移とともに、沖合底びき網漁業漁獲成績報告書に基づく漁場別漁獲統計を解析し、1980年以降の資源密度指数*の推移を調べた。加えて、秋田、山形、新潟の3県における漁獲物の体長組成から、近年の加入状況、漁獲物の年齢構成を考察した。*資源密度指数：10分マス目で設定された漁区ごとの月別CPUE（漁獲重量(kg)／ひき網回数）を一定期間（年または月）、ある海域内（中海区または小海区）で集計した値を有漁漁区数で除して求めた。

資源状態

日本海北区のハタハタ資源は、近年の全般的な漁獲動向等から、1990年代前半に比べて明らかな回復を示している。沖合底びき網（1そうびき）による資源密度指数の動向にも、1980年代前半までの急落と、1994年頃からの上昇を明瞭に見ることができる。2000年頃から資源密度指数はやや高めとなっており、特に全域で2001年と2002年における伸びが著しい。1960～1970年代の大豊漁期に比べれば資源の状態は低い水準を脱してはいないが、動向としては明らかな増加傾向にある。



管理方策

秋田県をはじめ、本資源を利用する各県では、若齢魚保護や漁獲努力量を押さえる試みが続けられており、近年明らかな資源水準の上昇が認められている。漁獲努力量を現状以下に抑えることにより、この上昇傾向が維持されられると思われる。2004年末の接岸群は、近年では豊度の高かった2002年末に産卵された年級であるため再び卓越になる可能性があり、2004年の資源状況はさらに高い水準となることが期待される。こうした良好な回復傾向を反映させ、ABClimitは基準となる過去の漁獲量（ここでは2001～2002年の平均値）に係数1.0を乗じ、ABCtargetは安全を見込んでその0.8（標準値）倍とした。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	26百トン	Cave2-yr	-	-
A B C target	21百トン	0.8ABClimit	-	-

資源評価のまとめ

- 漁獲量と沖合底びき網（1 そうびき）による資源量指数は、80年代前半までに急落、1995年以降漁業管理のもとで徐々に増えつつある
- 2002年の漁獲量は前年並み
- 近年、全域で資源密度指数の上昇がみられる

資源管理方策のまとめ

- 現状以上に漁獲圧を高めず、回復傾向にある資源を保護する
- 1995年以降の回復傾向に鑑み、管理目標は最近2年間の平均漁獲量をもとに設定した
- 産卵場と産卵群の保護が資源回復のために必要

資源評価は毎年更新されます。